

## 四国遍路の札所における大師堂

松岡明子（香川県文化振興課 副主幹）

### Daishidō at the Sacred Sites Along the Shikoku Pilgrimage

**Akiko MATSUOKA**

**Associate Director, Culture Promotion Division, Arts and Culture Bureau, Kagawa Prefectural Government**

In the precincts of the temples along the Shikoku pilgrimage, regardless of sect, there is a building called the Daishidō where a statue of Kōbō Daishi is enshrined, and it is customary for pilgrims to visit both the main hall and this building. According to historical records, in the early Edo period (late 17th century), less than half of the eighty-eight temples on the pilgrimage route had a Daishidō, but by around 1800, almost all of them had one. According to previous studies, as the Shikoku pilgrimage flourished, Daishidō were built and gradually became more important.

In this paper, I focus on the Daishidō as an example of the changes in space that occurred when individual temples and shrines became sacred sites (fudasho) and confirm that the statues of Kōbō Daishi were enshrined in the main hall before the Daishidō were built, and that some sacred sites had Chishō Daishidō to honour of the Buddhist priest, Enchin (814~891). Based on the results of the survey conducted in Kagawa Prefecture, I examine the history of the construction of the Daishidō and the relationship with the enshrined statue by highlighting the temple sites belonging to the Tendai sect and the Ji sect, which usually do not require the construction of a Daishidō.

At Temple no. 76 Konzōji, which belongs to the Tendai sect, the Chishō Daishidō, which had existed since the Middle Ages, was positioned as an inner sanctuary in the late 18th century, and a statue of Kōbō Daishi was enshrined in the hall of worship built in front of it. After that, the hall and the statues enshrined in it underwent various changes. Currently, statues of Chishō Daishi, Kōbō Daishi, and other Daishi are enshrined in the Daishidō, but the central statue is of Chishō Daishi.

At Temple no. 82 Negoroji, the Chishō Daishidō was built first, and a statue of Kōbō Daishi was enshrined in it from the end of the 18th century, and now an old statue of Chishō is housed beside the main hall. Temple no. 78 Gōshōji Temple belongs to the Ji sect but claim that the founder of the temple is also important and built the Daishidō in 1784. All these temples built and maintained their Daishidō while coordinating the logic of the temple belonging to each sect and the logic of the sacred site, and the juxtaposition of the main hall and the Daishidō symbolizing each logic is an important factor in considering the spatial characteristics of the sacred site.

### はじめに

四国4県では四国遍路の世界遺産登録に向けた取組みの一環として、関係市町村等と協力して札所寺院の総合的な文化財調査を実施している<sup>1</sup>。これらの成果を踏まえ、四国遍路世界遺産登録推進協議会では、四国遍路の世界遺産としての顕著な普遍的価値（Outstanding Universal Value）について検討を行っており<sup>2</sup>、四国内の寺社が札所となったことで生じた境内空間の変化の一つとして大師堂<sup>3</sup>のあり方に注目している。

現在、四国遍路の札所寺院88ヶ寺のうち9割強が真言宗寺院であり、他は天台宗4ヶ寺、臨済宗2ヶ寺、曹洞宗1ヶ寺、時宗1ヶ寺となっているが、その境内には宗派を問わず大師堂があるのが特徴で、巡礼者は本堂と大師堂の両方に参拝するのを通例とする。大師堂についての先行研究として、近藤喜博氏は弘法大師信仰の浸潤流布を下地として、近世には88ヶ所の随所に弘法大師の開基伝説を伝え、その御影堂を建立することで遍照一尊化を遂げた<sup>4</sup>と評し、喜代吉栄徳氏は「四国辺路日記」（澄禅、1653年）等の記録をもとに、

「御影堂」と「大師堂」の使い分けに着目しながら数の変遷を把握し、遍路道沿いの大師堂ほか諸堂の状況から地蔵信仰に大師信仰が重なり広がっていったとする<sup>5</sup>。頼富本宏氏と白木利幸氏は、江戸時代前期に遍路の主流が庶民になることで四国の大師一尊化が急速に進み、大師堂は札所に不可欠なものとして建立され、本堂に近接し大規模化していくとともに、道沿いや集落内にも大師堂が建立されていくことを指摘した<sup>6</sup>。上野進氏は札所寺院と遍路者に関して、線としての道を重視する見解と、聖なる場である札所の求心性を重視する見解の代表的な二つの見方があることを示したうえで、香川県内の札所における大師堂や茶堂建立の経緯から、大師堂が超宗派的な信仰の場となっていたことや、その整備に巡礼者が関与していたことを明らかにし、道沿いの大師堂が境内に持ち込まれたという見解の可能性を示した<sup>7</sup>。また、四国遍路ではないが秩父霊場における「札所」に着目した岩本馨氏は、そこでの超宗派的・集合的論理（札所的論理）と属宗派的・個別的論理（別当的論理）の使い分けや、それぞれの論理に基づく空間形成の在り方を明らかにしており、四国遍路の大師堂について考えるうえでも重要な示唆を与えている<sup>8</sup>。

これらの研究は、四国遍路の札所総体から見た大師堂の在り方を案内記等から把握しようとするものが中心で、個々の札所の関係資料に基づく研究は上野報告などまだ一部に限られる。文化財調査が進み、札所寺院ごとの個性や特質が見えてきつつあるなか、大師堂についても従来の研究で示された全体像を補完、検証するための具体的な事例に目を向けていく必要があるだろう。本稿では、まず札所全体における大師堂建立の時期や状況を把握するため、先行研究とも一部重複する作業になるが、『四国徧礼霊場記』（寂本、1689年）などの四国遍路に関わる主要な記録に記された大師堂に関わる記述を集めて一覧を作成し、そこから読み取れる内容を改めて整理する。そのうえで、個々の札所寺院側の実態を示す事例として、香川県内にある第76番金倉寺、第82番根香寺、第78番郷照寺について、大師堂の建立・改修等の経緯と安置像も含めた変遷を見ていく。これらの札所は、通常であれば弘法大師像を安置する大師堂の建立を必要としない天台宗および時宗の寺院であることから、岩本氏が指摘する二つの論理が、各札所でどのように構築され、作用したかを示す好例となるはずである。これらを踏まえ、大師堂の形状などにも目を向けながら、札所境内の中に大師堂がどのような空間として位置付けられていったのかについて考えたい。

## 1 記録類に記された札所の大師堂

一覧を作成するにあたり、全札所の境内説明と景観図が網羅されている史料として、『四国徧礼霊場記』（1689年）と「四国遍礼名所図会」（九臯主人、1800年）、および景観図は一部となるが『四国遍路道中雑誌』（松浦武四郎、1836年）を用いた<sup>9</sup>。これらが記された時代から場所や名称が変わっている札所もあるが、便宜上、札所の番号を基準に表を作成し、現在の寺院名と宗派を記した（表1）。各史料からは、弘法大師像を安置する建造物の記述を本文および図から抜き出し、該当する建物がない場合は弘法大師像の安置場所に関わる情報を記載している。あわせて、智証大師堂に関わる記述も（ ）内に記した。

元禄2年（1689）に刊行された『四国徧礼霊場記』には、四国遍路が現在のような88の札所を巡る巡礼として定着してきた17世紀後半の札所の状況が記されており、境内が荒廃し、道も険しかった様子がうかがえる。その中で、本文中に大師堂と思われる建物の記述がある札所は22ヶ所、図のみに記される札所も含めると35ヶ所に確認できる。記述がないことで堂の不在を断定はできないが、少なくとも大師堂が確認できるのは札所全体の4割弱で、徳島県、高知県の札所が多い。名称は「大師堂」、「御影堂」、「大師御影堂」などが混在し、図にはほとんど「大師」と表記されるが、使い分けの根拠は明確ではない<sup>10</sup>。

続く「四国遍礼名所図会」には、『四国徧礼霊場記』から100年以上を経た寛政12年（1800）の状況が記録されており、大師堂の記述がある札所は83ヶ所に増え、その建立が飛躍的に進んだ状況がうかがえる。名称は9割以上が「大師堂」で、「御影堂」は徳島県南部や高知県の一部の札所に見られる。注目したいのは、56番泰山寺や60番横峯寺において、大師堂はないが「脇士大師」など本堂にある本尊の脇に弘法大師像が安置されていることを記す点で、61番香園寺にも「大師、方丈に在す」として弘法大師像の所在場所が記される。これらの記述は、大師堂がなくても弘法大師像が本堂などに安置され、巡礼者の参拝対象となっていたことを示すものと考えてよいだろう<sup>11</sup>。

『四国遍路道中雑誌』は、松浦武四郎が天保7年（1836）に遍路した際の記録とされ<sup>12</sup>、同書では59番国分寺に「大師の尊像は本堂の傍らに安置す」と記す以外、すべての札所に大師堂が確認できる<sup>13</sup>。71番弥谷寺

表1 記録類に記された札所の大師堂

札所番号	寺院名	現在の宗派	『四国徧礼霊場記』(1689年)	『四国遍礼名所図会』(1800年)	『四国遍路道中雑誌』(1836年)
1	霊山寺	高野山真言宗	「大師堂」、 図「御影堂」	「大師堂」	「大師堂」
2	極楽寺	高野山真言宗	/	「大師堂」	「大師堂」
3	金泉寺	高野山真言宗	/	「大師堂」	「大師堂」
4	大日寺	東寺真言宗	/	「大師堂」	「大師堂」
5	地藏寺	真言宗御室派	/	「大師堂」	「大師堂」、 図「大師」
6	安楽寺	高野山真言宗	/	「大師堂」	「大師堂」
7	十楽寺	真言宗単立	図「御影堂」	「大師堂」	「大師堂」
8	熊谷寺	高野山真言宗	「大師御影堂」、 図「大師」	「大師堂」	「大師堂」、 図「大師堂」
9	法輪寺	高野山真言宗	/	「大師堂」	「大師堂」
10	切幡寺	高野山真言宗	「御影堂」、 図「大師」	「大師堂」	「大師堂」
11	藤井寺	臨濟宗妙心寺派	/	「大師堂」	「大師堂」
12	焼山寺	高野山真言宗	「御影堂」、 図「大師」	「大師堂」	「大師堂」
13	大日寺	真言宗大覚寺派	/	「大師堂」	「大師堂」
14	常楽寺	高野山真言宗	/	「大師堂」	「大師堂」
15	国分寺	曹洞宗	/	「大師堂」	「大師堂」
16	観音寺	高野山真言宗	図「大師」	「大師堂」	「大師堂」
17	井戸寺	真言宗善通寺派	/	「大師堂」	「大師堂」
18	恩山寺	高野山真言宗	図「大師」	「大師堂」	「大師堂」
19	立江寺	高野山真言宗	「大師堂」、 図「大師」	「大師堂」	「大師堂」
20	鶴林寺	高野山真言宗	図「大師」	「御影堂」(弘法大師安置)	「大師堂」、 図「大師堂」
21	太龍寺	高野山真言宗	「大師堂」、 図「大師」	「御影堂」(大師御自作)	「大師堂」、 図「大師」
22	平等寺	高野山真言宗	図「大師」	「大師堂」	「大師堂」
23	薬王寺	高野山真言宗	「大師御影堂」、 図「大師」	「大師堂」	「大師堂」
24	最御崎寺	真言宗豊山派	図「大師」	「大師堂」	「大師堂」、 図「大師」
25	津照寺	真言宗豊山派	/	「大師堂」	「大師堂」
26	金剛頂寺	真言宗豊山派	「御影堂」、 図「大師」	「御影堂」(大師安置)	「大師堂」
27	神峯寺	真言宗豊山派	「大師堂」、 図「大師」	/	「大師堂」
28	大日寺	真言宗智山派	/	「大師堂」	「大師堂」
29	国分寺	真言宗智山派	「大師御影堂」、 図「大師」	「御影堂」	「大師堂」
30	善楽寺	真言宗豊山派	/	「大師堂」	「大師堂」
31	竹林寺	真言宗智山派	「大師堂」、 図「大師」	「大師堂」	「大師堂」、 図「大師」
32	禅師峰寺	真言宗豊山派	図「大師」	「大師堂」	「大師堂」
33	雪蹊寺	臨濟宗妙心寺派	/	「大師堂」	「大師堂」、 図「大師堂」
34	種間寺	真言宗豊山派	/	「大師堂」	「大師堂」
35	清瀧寺	真言宗豊山派	「大師の御影堂」、 図「大師」	「御影堂」	「大師堂」
36	青龍寺	真言宗豊山派	図「御影堂」	「御影堂」	「大師堂」、 図「大師」
37	岩本寺	真言宗智山派	/	「大師堂」	「大師堂」
38	金剛福寺	真言宗豊山派	「大師堂」、 図「大師堂」	「大師堂」	「大師堂」、 図「大師」
39	延光寺	真言宗智山派	「大師御影堂」、 図「大師」	「御影堂」	「大師堂」
40	観自在寺	真言宗大覚寺派	「御影堂」、 図「大師」	「大師堂」	「大師堂」
41	龍光寺	真言宗御室派	図「大師堂」	「大師堂」	「大師堂」
42	仏木寺	真言宗御室派	「仏木大師堂」、 図「大師堂」	「大師堂」	「大師堂」
43	明石寺	天台寺門宗	/	「大師堂」	「大師堂」
44	大寶寺	真言宗豊山派	/	「大師堂」	「大師堂」、 図「大師堂」
45	岩屋寺	真言宗豊山派	「大師堂」、 図「大師」	「大師堂」	「大師堂」、 図「大師堂」
46	浄瑠璃寺	真言宗豊山派	/	「大師堂」	「大師堂」
47	八坂寺	真言宗醍醐派	/	「大師堂」	「大師堂」
48	西林寺	真言宗豊山派	/	「大師堂」	「大師堂」
49	浄土寺	真言宗豊山派	図「大師」	「大師堂」	「大師堂」

札所番号	寺院名	現在の宗派	『四国徧礼霊場記』(1689年)	『四国遍礼名所図会』(1800年)	『四国遍路道中雑誌』(1836年)
50	繁多寺	真言宗豊山派	/	「大師堂」	「大師堂」
51	石手寺	真言宗豊山派	「影堂」、 図「大師堂」	「大師堂」	「大師堂」
52	太山寺	真言宗智山派	/	「大師堂」	「大師堂」、 図「大師」
53	圓明寺	真言宗智山派	/	「大師堂」	「大師堂」
54	延命寺	真言宗豊山派	/	「大師堂」	「大師堂」
55	南光坊	真言宗御室派	図「大師堂」	「大師堂」	「大師堂」
56	泰山寺	真言宗単立	/	/ (「脇士大師」)	「大師堂」
57	栄福寺	高野山真言宗	/	「大師堂」	「大師堂」
58	仙遊寺	高野山真言宗	/	「大師堂」	「大師堂」
59	国分寺	真言律宗	/	「大師堂」	/ (大師の尊像は本堂の傍らに安置す)
60	横峰寺	真言宗御室派	/	/ (「脇士大師」)	「大師堂」、 図「大師」
61	香園寺	真言宗御室派	/	/ (「大師、方丈に在す」)	「大師堂」
62	宝寿寺	真言宗単立	/	「大師堂」	「大師堂」
63	吉祥寺	真言宗東寺派	図「大師」	「大師堂」	「大師堂」
64	前神寺	真言宗石鉄派 (総本山)	/	「大師堂」	「大師堂」
65	三角寺	高野山真言宗	/	「大師堂」(本堂のわきにあり、本尊ハ弥勒菩薩、脇士ハ大師)	「大師堂」、 図「大師堂」
66	雲辺寺	真言宗御室派	「御影堂」、 図「御影堂」	「大師堂」	「大師堂」
67	大興寺	真言宗善通寺派	「大師の御影堂」、 図「大師」	「大師堂」	「大師堂」
68	神恵院	真言宗大覚寺派	/	/	「大師堂」、 図「大師堂」
69	観音寺	真言宗大覚寺派	/	「大師堂」	「大師堂」、 図「大師」
70	本山寺	高野山真言宗	/	「大師堂」	「大師堂」
71	弥谷寺	真言宗善通寺派 (聞持窟、大師の御影もあり)	/	「奥院大師堂」	「奥院」(「大師求聞持修行窟」と共に記される)
72	曼荼羅寺	真言宗善通寺派	/	「大師堂」	「大師堂」
73	出釈迦寺	真言宗御室派	/	「大師堂」	「大師堂」
74	甲山寺	真言宗善通寺派	/	「大師堂」	「大師堂」
75	善通寺	真言宗善通寺派	「大師堂」、 図「大師」	「西院大師堂」(大師32歳の御時、入唐の前御自作の像なり。則大師誕生所ハ今の大師堂なり。古の奥御殿の跡なり。)	「大師堂」、 図「大師堂」
76	金倉寺	天台寺門宗	/ (「智証大師御影堂」、 図「智証堂」)	「大師堂」(弘法大師) (「智証大師堂、大師堂の後にあり、則誕生の地なり)	「大師堂」
77	道隆寺	真言宗醍醐派	/	「大師堂」	「大師堂」
78	郷照寺	時宗	/	「大師堂」	「大師堂」
79	天皇寺	真言宗御室派	/	「大師堂」	「大師堂」
80	国分寺	真言宗御室派	/	「大師堂」	「大師堂」
81	白峯寺	真言宗御室派	図「大師堂」	「大師堂」	「大師堂」、 図「大師堂」
82	根香寺	天台宗	/ (図「智証堂」)	「大師堂」 (「智証大師堂」)	「大師堂」
83	一宮寺	真言宗御室派	/	「大師堂」	「大師堂」
84	屋島寺	真言宗御室派	/	「大師堂」	図「大師堂」
85	八栗寺	真言宗大覚寺派	/	「大師堂」	図「大師堂」
86	志度寺	真言宗善通寺派	/	「大師堂」	「大師堂」
87	長尾寺	天台宗	/	「大師堂」	「大師堂」
88	大窪寺	真言宗単立	「大師堂」、 図「御影」	「大師堂」	「大師堂」
合計			35	83	87

注 • 札所の名称・宗派は現在のものを表記した。江戸期に名称や場所が異なる札所についても、本表では該当する札所の番号の欄に記した。  
• 弘法大師を本尊とする建造物を対象として記載し、該当の建物がない場合は弘法大師像の安置場所等の情報を補足した。

(「奥院」) 以外はすべて「大師堂」で統一されるが、この書が後年に再構成してまとめられていることなどを考慮すると、これが巡礼当時の現地での呼称を反映したものかは一考を要する。しかし、札所のほぼすべてに弘法大師の安置堂が設けられ、松浦がそれを「大師堂」と認識していたということは言えるだろう。

以上のことから、17世紀後半には大師堂のある札所は半数に満たなかったが、その後建立が進み、19世紀前半にはほぼすべての札所に建立されていたことが改めて確認できる<sup>14</sup>。堂の名称は「大師堂」や「御影堂」などがあるが、使い分けの根拠についてはさらに検討が必要である。加えて、これらの呼称は記録をまとめた巡礼者側の認識を反映している可能性がある点にも留意が必要だろう。また、大師堂がない札所では、弘法大師像が本堂や方丈などに安置されている例があり、大師堂建立以前の状況をうかがわせて興味深い。これに関連する史料として、明和3年(1766)10月に高松藩五代藩主松平頼恭が85番八栗寺に御成した際の記録には、本堂安置の弘法大師御影について「此像無之候而ハ四国順礼杯ニ臨相尋候故、〈持仏堂の大師〉是へ持出候」(〈 〉は割注)と説明し、頼恭が「何様此節大師繁栄之時節尤」と答えたことが記されている<sup>15</sup>。18世紀後半に、多くの遍路者が参拝のため弘法大師像の所在を尋ねる状況があり、八栗寺がそれに対応していたことがわかる。同様に、各札所においても安置場所の移動や大師堂の建立、さらには堂の大規模化や本堂への近接<sup>16</sup>などによって、遍路する人々の需要に応じていったと考えられる。

最後に、智証大師の安置堂については76番金倉寺と82番根香寺の2ヶ寺に記述が見られ、両寺とも『四国徧礼霊場記』(1689年)には「智証大師御影堂」・「智証堂」のみ記され、「四国遍礼名所図会」(1800年)では「大師堂」と「智証大師堂」が併記されるが、『四国遍路道中雑誌』(1836年)では「大師堂」のみとなる。智証大師ゆかりの天台宗寺院では、大師堂がどのように境内に組み込まれていったのだろうか。次に、各寺院に遺された記録類に基づいて見ていきたい。

## 2 第76番札所 金倉寺

金倉寺は、鶏足山宝幢院と号する天台宗の寺院で、香川県善通寺市金蔵寺町の平地に伽藍を構える。智証大師円珍の誕生所として古くから信仰を集め、鎌倉時代の作とされる「絹本著色智証大師像」(重要文化財)や木造の智証大師坐像などが伝来する。16世紀中頃には戦火で境内が荒廃し、真言僧が寺跡を守っていたが、慶安4年(1651)に初代高松藩主松平頼重の命により天台宗に改宗され、今日に至る。

現在、金倉寺境内の大師堂に安置されている「大師」の像は以下の4軀である<sup>17</sup>。

智証大師坐像	鎌倉時代、像高91.0cm
弘法大師坐像	江戸時代、安永7年(1778)安置、像高65.2cm
天台大師坐像	江戸時代、天保2年(1831)開眼、像高32.5cm
伝教大師坐像	江戸時代、天保2年(1831)開眼、像高33.0cm

史料をもとに、金倉寺の大師堂とその安置像の変遷を見てみよう。大師堂については、徳治3年(1308)3月1日に落雷のため「金堂、新御影堂、講堂」など数棟が焼失した後、30年余りを経て再興の援助を求め記録が遺されており、14世紀には境内に御影堂が存在していたと考えられる<sup>18</sup>。安置像の記録はないが、同じ史料中に「当寺者智証大師誕生之地」と記されることから、御影の主は智証大師と考えてよいだろう。江戸時代になると、慶安2年(1649)に高松藩主松平頼重が「智証大師御影堂」を建立し、同4年に本堂も完成する<sup>19</sup>。『四国徧礼霊場記』(1689年)が「智証大師御影堂あり」と記するのは、この頼重造営の智証大師堂と考えられるが、「鶏足山金倉寺縁起」(1742年浄書)は智証大師御影の安置場所を「祖堂」と記しており、金倉寺においても呼称の違いがあったことがうかがえる<sup>20</sup>。

18世紀後半になると、境内に智証大師堂が単独で建っていた状況に変化が訪れる。明和5年(1768)、五代藩主松平頼恭が「智証大師御影堂」を修補し、その翌年に新たな本堂(金堂)を建立するとともに、それまでの旧本堂を「奥院拜殿」として智証大師堂の前面に引き移したのである<sup>21</sup>。移築された「拜殿」には、安永7年(1778)に弘法大師と役行者の像が安置されたが、その経緯について「安永七戌歳日次」には次のように記されている<sup>22</sup>。弘法大師像は、金毘羅の住人岡源内吉近が四国順礼の結縁のために発願して買田(現香川県まんのう町)恵光寺の像を懇望して安置し、役行者像については、高松南新町の池田屋本家中村伝次郎らが施主となって丸亀の遍照庵にあった像を移したもので、これら二尊の像を奥院拜殿の左右両檀に安置

供養することは、前住職慈興の金堂建立時からの心願であったという。18世紀には各地の札所で大師堂の建立が進んだが、金倉寺においては、智証大師堂の前に「拝殿」として弘法大師像の安置堂を設けて四国遍路の巡礼者に対応すると同時に、智証大師堂を「奥院」とすることによって二つの大師堂の位置付けを明確にし、智証大師誕生所としての論理を示そうとしたと考えられる。

これらの造営後の景観が「四国遍礼名所図会」(1800年)に描かれている(図1)。「大師堂/本堂の西の方、弘法大師」、「智証大師堂/大師堂の後にあり、則誕生の地なり」と記されることから、向かって右の本堂に近い入母屋造の建物が大師堂(旧本堂)、後方にある宝形造の堂が智証大師堂であろう。智証大師堂は四方を塀で囲まれ、奥院らしい聖性を感じさせる佇まいであるのに対し、大師堂は向拝のある参拝者に開かれた堂であり、外観からも両堂の性質の違いが感じられる。天保2年(1831)に天台大師(智顛)と伝教大師(最澄)の木像が開眼され、<sup>23</sup>安政2年(1855)には本堂に天台大師像と伝教大師像、智証大師堂に智証大師像、「大師堂拝殿」に弘法大師と神変大士(役行者)の像が安置されていたようである。<sup>24</sup>ただし、その後の境内の状況は明らかでなく、旧本堂を移築した大師堂がいつまで使われていたのか、現時点では判然としない。<sup>25</sup>

大師堂に関わる次の変化が確認できるのは明治初頭で、明治9年(1876)のものと思われる境内図(図2)には「智証大師」と記した堂の前に「弘法大師」と記す宝形造の堂が描かれており、この頃には二人の大師の像をそれぞれ安置する宝形造の堂が前後に並んでいたことがわかる。<sup>26</sup>明治14年(1881)の記録では、大破した「奥院大師堂」修理のため智証大師像を一時的に「前殿」に移したという記事があるが<sup>27</sup>、昭和13年(1938)に金倉寺内の御遠忌事務局が発行した小冊子では智証大師像の安置場所を「大師堂奥之院」と呼んでおり、<sup>28</sup>この時期、「大師堂」という語が指し示す堂が、智証大師堂から弘法大師堂へと変化していった可能性が考えられる。

昭和56年(1981)、現本堂の建設にあたり、明和6年(1769)建立の旧本堂は智証大師堂の前に移築され、現在の「大師堂」(祖師堂)となる(図3)。同時に像の配置も変化し、大師堂では須弥壇中央に智証大師像と両脇の天台大師・伝教大師像、脇仏壇に弘法大師像と神変大士像を安置するとともに、「奥院」(奥殿)と呼ぶ後方堂には近年制作された智証大師の小像を安置する(図4)。前後2堂の配置は踏襲されるが、金倉寺において最も重視されてきた智証大師の古像が前方の大師堂に移ったことは重要な変化と言えるだろう。

これらの変遷をまとめると、以下ようになる。中世以来、金倉寺には智証大師像を安置する御影堂があったが、18世紀後半、その前方に弘法大師像の安置堂が設けられる。名称は史料により異なるが、智証大師堂を「奥院」、弘法大師堂を「拝殿」とする点は共通しており、2堂の関係性は明確である。19世紀後半に弘法大師堂が建て替えられ、宝形造の堂が前後に並ぶ配

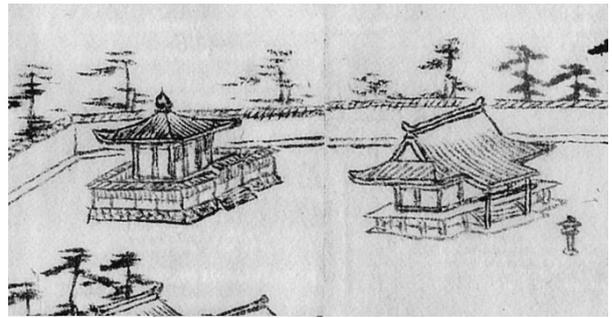


図1 金倉寺の「智証大師堂」(左)と「大師堂」(右)  
(「四国遍礼名所図会」1800年、個人蔵)

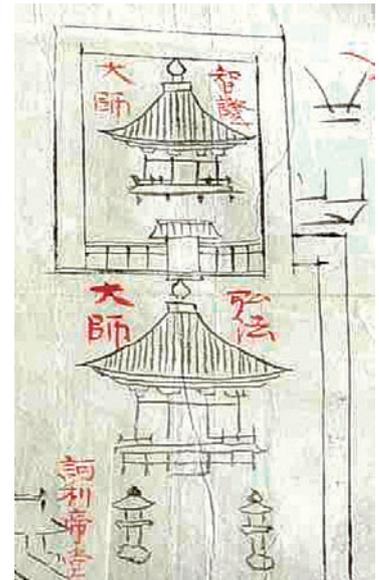


図2 金倉寺の「智証大師」  
・「弘法大師」安置堂  
(「諸事願濟採集」1876年)



図3 金倉寺 大師堂



図4 金倉寺 奥院

置になると、智証大師堂を「奥院」とする呼称は維持されるが、弘法大師堂は「拝殿」という位置付けから、次第に「大師堂」へと変化していったと考えられる。宝形造の2堂の並立には、二人の大師の存在が可視化される意味もあっただろう。20世紀後半には旧本堂が智証大師堂の前に移築されて大師堂となるが、これに伴って奥院の智証大師古像が前方の大師堂に移り、中心的な尊像となる。奥院に新たな智証大師像を安置することで智証大師堂としての位置付けは保ちつつ、実質的に2堂の役割は前方の大師堂に集約されたと言っただろう。

金倉寺は、近世以降、智証大師の誕生所として一貫して智証大師像を重んじ、本山とのつながりも深かった<sup>29</sup>。ここに四国遍路の巡礼者が求める弘法大師像を迎えるにあたり、「奥院」と「拝殿」という構造を新たに設け、天台宗寺院であり誕生所として、智証大師を一步秘された「奥」に安置して重視しながらも、札所としては境内中央に面する前方堂に弘法大師像を安置し多くの参拝者を集めるという独自の境内空間を生み出した。この二重構造は変化しながらも大きな矛盾をきたすことなく定着し、2堂の役割が前方の大師堂に集約された今も、堂内諸像の配置場所に反映されているのである。

### 3 第82番札所 根香寺

根香寺は青峰山千手院と号する天台宗の寺院で、高松市中山町の五色台と呼ばれる山地に所在する。智証大師の創建、または弘法大師が創建し智証大師が遊息したとする縁起があり、古くは真言・天台の両宗が並存していたと考えられる。中世末には真言宗が有力になっていたが、17世紀中頃に初代高松藩主松平頼重の意向で天台宗に改宗し、境内の主要な堂宇が再建された。本尊の木造千手観音立像は秘仏とされる平安時代の作で、国の重要文化財に指定されている。

根香寺に所蔵されている「大師」の像は、以下の3軀である<sup>30</sup>。

智証大師坐像	元徳3年(1331)、像高59.8cm、香川県指定有形文化財
弘法大師坐像	江戸時代、寛政10年(1798)台座銘、像高35.0cm
天台大師坐像	天保9年(1838)、像高40.3cm

智証大師坐像については、像底板に阿闍梨道忍が根香寺に奉獻したという元徳3年の墨書があり、この頃から同寺に所蔵されていたことがわかる。続く史料は「青峰山根香寺縁起」で、延宝年間(1673~81)に初代藩主松平頼重が金堂、護摩堂と共に「祖師堂」を造立したと記しており<sup>31</sup>、それから程なく刊行された『四国徧礼霊場記』(1689年)に智証大師御影の記事と本堂向かって右に「智証堂」の図があることから、「祖師堂」は智証大師像の安置堂であったと考えられる。宝暦4年(1754)に五代藩主松平頼恭が「智証大師堂」を再建、寛政8年(1796)に八代藩主頼起が「智証大師堂」の修復を行っていることから、その存在が確かめられる<sup>32</sup>。

弘法大師坐像は、台座銘文から寛政10年(1798)に大坂小橋堀村の尼恵性らによって寄進されたと考えられるもので<sup>33</sup>、「四国遍礼名所図会」(1800年)には「大師堂〈本堂の側にあり〉、智証大師堂」という記述が見える。境内図には本堂の左右に宝形造の堂が描かれており、大師堂や智証大師堂がどれを指すのか判然としないが、弘法大師を安置する堂があったことは確かである(図5)。天保4年(1833)の境内記録から、当時は「祖師堂」に智証大師と弘法大師の両像が安置されていたことがうかがえ、天台大師坐像については、同9年(1838)に寺に迎えられた後、本堂に安置されたことが追記により知られる<sup>34</sup>。『金毘羅参



図5 根香寺の「大師堂」と「智証大師堂」  
(「四国遍礼名所図会」1800年、個人蔵)



図6 根香寺の「大師堂」  
(「讃岐国名勝図会」1854年、  
独立行政法人 国立公文書館蔵)

詣名所図会』(1847年刊)では、本堂向かって右側に「大師堂」を描いて「弘法大師を安ず」と説明し、『讃岐国名勝図会』(1854年刊)も同じ場所に「大師堂」を描き、本文では「祖師堂」と記している(図6)。これらの資料から、根香寺では18世紀末に弘法大師像を迎えた後、本堂の向かって右側に建つ元の智証大師堂を「祖師堂」等として両大師の像を安置していたと考えられる。

昭和45年(1970)、秘仏である本尊千手観音像の開帳を機に本堂が後方の山手に移築されたことにより、本堂を中心として護摩堂、大師堂(祖師堂)の3堂が並ぶ主要堂の配置が変化する。これに伴って智証大師像は本堂内の本尊脇に収められ、大師堂には弘法大師像(中央)と天台大師像が安置されることとなった。また、大師堂の前面には新たな礼堂が建てられ、今日に至っている(図7)。

根香寺の場合、金倉寺とは異なり、弘法大師像を智証大師堂に迎えるという方法を選択した。先の天保4年の記録では智証大師坐像が先に記載されることから、堂の主尊は智証大師像であったと想像されるが、参拝者が二つの大師像の存在や配置を理解していたかは不明で、少なくとも四国遍路の巡礼者には『金毘羅参詣名所図会』等に記されるように弘法大師像を安置する「大師堂」、あるいは「祖師堂」として認識されたのではないかと考えられる。この構造は昭和の造営後に変化を迎え、宗派や寺史に関わる智証大師像を一段上の本堂に安置し、元の「智証大師堂」を弘法大師の安置堂である大師堂にすることで、二つの論理に基づく境内空間を明確に分ける方向で整理が行われた。ただし、この変化は安置像との関係によって理解されるもので、尊像まで拝しない多くの参拝者には知りえない構造となっていることも意識しておく必要があるだろう。



図7 根香寺 礼堂(左)と大師堂(右)

#### 4 第78番札所 郷照寺

郷照寺は香川県宇多津町にある時宗寺院で、仏光山広徳院と号し、四国遍路の案内記等には「道場寺」、「江照寺」とも記される。開基については行基、弘法大師など諸説あり、正応元年(1288)に一遍が再興して時宗に改めたと伝えられる。本尊の木造阿弥陀如来坐像は鎌倉時代の作で、県指定有形文化財に指定されている。

郷照寺の大師堂には、江戸時代、18世紀の作とみられる弘法大師坐像(像高38.2cm)が安置されており、「厄除うたづ大師」と呼ばれて広く信仰されている<sup>35</sup>。この大師堂の建立に関係する史料として、郷照寺所蔵の「開帳中記録」に次のような興味深い記事がある<sup>36</sup>。

奉願口上／一 拙寺本堂屋根並戸廻り椽廻り／就大破葺替修復等仕度儀ニ／奉存候得共至極貧寺故何之／助力も無御座候得者難及自力御／座候、然所来ル辰三月札所開祖／弘法大師九百五拾年ニ付右造／當御法謝彼是本尊靈宝等／開帳仕度儀ニ奉存候、尤宗門者時／宗之儀ニ御座候得共右札所開祖／大師之儀ニ御座候故御法楽旁ヲ以／右之段奉願候 (後略)

天明3年(1783)9月に郷照寺が寺社役所に提出した願書の覚えで、大破した本堂の屋根などを修復しあぐねていたが、翌年3月は弘法大師の950年御遠忌なので本尊や靈宝等の開帳をしたいという。続いて、寺の宗門は時宗だが、札所開祖である大師に関することなのでその法楽のために願い出ると説明しており、郷照寺が自ら時宗寺院であることの断りを入れたうえで、真言宗の開祖としてではなく、「札所開祖」である弘法大師の御遠忌を重んじる姿勢を示す点は注目される。真言宗以外の札所において生み出された論理の一端をうかがわせる貴重な史料であるとともに



図8 郷照寺の「大師堂」  
(「四国遍礼名所図会」1800年、個人蔵)

に、本堂等の改修を行うために、札所であることを活用しているように見えるのも興味深い。大師堂は翌天明4年2月に完成して弘法大師像が安置され、「四国遍礼名所図会」(1800年)には、こうして建立された宝形造の大師堂が本堂裏の一段高い位置に描かれている(図8)。

『金毘羅参詣名所図会』(1847年刊)は、道場寺(郷照寺)について「丸亀に着船して四国の霊場を遍礼する輩は当寺をもって札はじめとなす」と記し、金剛杖や数珠、札はさみなどを寺で出し、遍路者はそれを持って巡礼したと説明している。丸亀や宇多津は四国に上陸する際の主要な港であり、江戸時代末期の郷照寺は多くの巡礼者が最初に立ち寄る重要な札所となっていたのだろう。同書の境内図には、宝形造の大師堂の前に礼堂らしき建物が見え、その前で参拝する人の姿が描かれるなど、篤く信仰されていた様子がうかがえる(図9)。現在、大師堂の前には礼堂(大正6年/1917)と鞘堂(昭和30~40年代)が連なり、正月には「厄除うたづ大師」の参拝に四国内外から多くの人々が集まる(図10)。時宗寺院の境内に四国遍路の参拝の場として建立された大師堂は、さらに厄除祈願の場としても地域の人々の信仰を集め、礼堂や鞘堂を伴った空間を築いていったと考えられる。



図9 郷照寺の「大師堂」  
(「金毘羅参詣名所図会」1847年、  
独立行政法人 国立公文書館蔵)



図10 郷照寺 大師堂(左)と礼堂(右)

### おわりに

香川県内における真言宗以外の札所寺院を素材として、大師堂の建立経緯とその変遷について見てきた。いずれも18世紀後半に弘法大師像を迎え入れたが、その安置堂の設け方は一様ではなかった。金倉寺では、先にあった智証大師堂の前に弘法大師堂を建立し、前後二つの大師堂からなる新たな構造の空間を設けた。根香寺では、智証大師堂に弘法大師像を迎えて両大師像を安置したが、その後、本堂に智証大師像、大師堂に弘法大師像を安置することで、空間を分けて論理の整理を行った。郷照寺では、宗派の論理とは別に「札所の開祖」という位置付けを与えることによって大師堂を建立しており、これらのことから、近世後期の札所における大師堂の整備が、各寺の事情や状況に応じて多様な形で行われていたことがわかる。

四国遍路の札所には、もともと宗派や各所の歴史等の論理に基づいて築かれた本堂(または本社)を中心とする境内があった。それが後に札所となり、巡礼者らが求める論理に基づいて弘法大師像の安置堂を設けることで、いわば二つの中心を持つ境内空間が成立した。その両者が並存する構造が、四国遍路における札所の空間的な特徴のひとつであると言えるのではないだろうか<sup>37</sup>。ただし、大師堂の位置付け方は多様で、例えば金倉寺において弘法大師安置堂はさまざまな名称で呼ばれてきた。言い換えれば、本稿で一覧表作成に用いたような「大師堂」という表記中心の記録類は、巡礼者の側から見た情報を記すものであることを改めて認識するとともに、それらを元に語られてきた「大師一尊化」という評価についても、いま少し複層的に捉えていく必要があるのではないだろうか。金倉寺や根香寺で今も智証大師像が重んじられ、各寺なりの工夫の中で境内の空間が成立していることを考えると、少なくとも札所の側から見た別の視点を、さらに加えていく余地があるように思う。

最後に、札所にある大師堂の多くは宝形造の堂であり、御影堂としての伝統的な形式を踏襲している<sup>38</sup>。それらの中には、本稿で紹介したように礼堂などを伴う例が見られ、堂に付随する参拝者のための空間が充実していった状況がうかがえる。遍路する人々にとっては、大師堂を参拝しながら四国遍路を行うことが重要であり、札所における大師堂は巡礼という行為や自らの信仰を確認するための「場」として機能したのではないだろうか。そう考えると、四国遍路の巡礼の道沿いに、札所以外にも無数の大師堂が点在し、それらを

つなぐように巡礼者が歩いてきたことも重要な意味を帯びてくる。本稿では札所寺院に関わる報告に終始したが、つながる場である遍路道も視野に入れた検討が今後必要であろう。

\*本稿の執筆にあたり、「普遍的価値の証明」研究会で行った事例報告および委員の先生方からご意見いただいた内容を参考とさせていただくとともに、武田和昭先生、山岸常人先生にご助言いただいた。記して謝意を表したい。

## 註

- 1 香川県では、平成21年度から札所寺院の詳細調査を開始し、その成果をまとめた調査報告書を順次刊行している。なお、遍路道についても関係市町村が県と協力しながら文化財調査を進めている。
- 2 四国遍路世界遺産登録推進協議会は、四国の産学民官が連携して四国遍路の世界遺産登録を目指して取り組むことを目的として平成22年に設立された。「顕著な普遍的価値」の検討に関わる活動については「〈普遍的価値の証明〉研究会 中間報告（平成30年度・令和元年度）」（令和2年6月）参照（四国遍路世界遺産登録推進協議会 HP <<https://88sekaiisan.org>>）。
- 3 本稿において「大師堂」と記した場合は弘法大師を安置する堂を表し、智証大師など他の大師像を安置する堂については各大師名を冠して「智証大師堂」のように表記する。
- 4 近藤喜博『四国遍路』（桜楓社、1971年）。なお、同氏は「遍路の遍照一尊化とは、弘法大師信仰に彩られるといった意味」と記している。
- 5 喜代吉栄徳「四国大師の所在」（『善通寺教学振興会紀要 第3号』善通寺教学振興会、1996年）
- 6 頼富本宏・白木利幸『日文研叢書23 四国遍路の研究』（国際日本文化研究センター、2001年）
- 7 上野進「四国遍路と札所寺院 -香川県の札所寺院調査から-」（『四国遍路の世界の巡礼 第5号』愛媛大学 四国遍路と世界の巡礼研究センター、2020年）
- 8 岩本馨「札所」（『寺社をささえる人々』吉川弘文館、2007年）
- 9 「四国辺路日記」（澄禅、1653年）については札所ごとの記述内容や情報量に差があり、境内図もないためここでは用いなかった。『四国徧礼霊場記』と「四国徧礼名所図会」は『四国遍路記集』（伊予史談会、1981年）、『四国遍路道中雑誌』は『松浦武四郎紀行集（中）』（富山房、1975年）を用いた。なお、「四国徧礼名所図会」の写真は小松勝記氏に提供いただいた。
- 10 「御影」が弘法大師の彫像あるいは画像を指すと考えると、17世紀後期の段階で古像あるいは重要な伝来を有する像などがあった場合に「御影堂」の語が用いられたとの推論も成り立つが、像の残存状況と必ずしも一致しておらず、さらなる検討が必要である。
- 11 武田和昭氏は、御影堂がなくても弘法大師像が本堂に安置され大師信仰が行われていた可能性について触れ、各札所の弘法大師像の造立年代が決め手になると指摘している。武田和昭『四国辺路の形成過程』（岩田書院、2012年）
- 12 松浦武四郎は、実際には天保5年（1834）と同7年（1836）の2回にわたって四国遍路を行っており、本書作成にあたってこれらを再構成したと考えられている。
- 13 ただし、59番国分寺について「四国徧礼名所図会」（1800年）には「大師堂」の記載がある。火災など何らかの事情で堂がなかったか、1800年段階で大師堂が確認できない60番・61番札所等と情報が錯誤した可能性も考えられる。
- 14 四国4県が進めている札所寺院の文化財調査においても、これらの変遷を裏付ける棟札や関係記録等が確認されている。
- 15 「御領分中人別勸化帳」（蔵5-64）。第85番札所八栗寺詳細調査（香川県・香川県教育委員会）。報告書は今後刊行予定であり、本稿は（公財）元興寺文化財研究所が作成した調査報告書を参考とした。なお、本資料のように調査報告書が未刊行の場合は調査の際の資料番号のみを明記する（以下同）。
- 16 本稿では大師堂の大規模化や本堂への近接について詳しくは触れないが、参考として事例をあげると、86番志度寺は17世紀後半には大師堂がなかったが、「四国徧礼名所図会」（1800年）には本堂横に茅葺のような小堂が描かれ、天保4年（1833）に瓦葺の現存堂が建立される。また、81番白峯寺は17世紀後半には本堂に続く石段の途中に大師堂があったが（『四国徧礼霊場記』）、「四国徧礼名所図会」では本堂の向かって左横に移動し、文化8年（1811）には本堂向かって右横に現在の大師堂が建立されている。

- 17 『四国八十八ヶ所霊場第七十六番札所 金倉寺調査報告書 第1分冊』(香川県・香川県教育委員会、2022年)
- 18 「金蔵寺衆徒等目安案」(『新編香川叢書 史料篇(二)』香川県教育委員会、1981年)
- 19 「智証大師御影堂建立棟札」(棟札17)、前掲注17書掲載。「口上」(資料2-50-2)等
- 20 「鶏足山金倉寺縁起」(『香川叢書 第一』香川県、1972年)
- 21 「智証大師御影堂修補棟札」(棟札22・24)、「金堂造替棟札」(棟札27)、「明和三年丙戌日次」(資料1-4-2)
- 22 「安永七戌歳日次」(資料1-34-6)
- 23 「文政年中記事録」(資料1-11)
- 24 「当寺第九世弘順死後出役相改役所書出留」(資料1-36)
- 25 『金毘羅参詣名所図会』(1847年刊)には智証大師尊像安置の「御影堂」の記述と宝形造の「御影堂」図、『讃岐国名勝図会』(1854年刊)も智証大師像を安ずる「奥院祖堂」の記述と宝形造の「祖師堂」図のみがあり、大師堂や「拜殿」等は確認できない。安政2年記録との違いについては今後の検討が必要である。
- 26 「諸事願濟採集」(資料10-21)
- 27 「当寺中興第十二世松田俊順一代寸功記」(資料1-12)
- 28 『智証大師』(御遠忌事務局、1938年)
- 29 明和5年の「智証大師堂修理棟札」(棟札22・24)には本山であった聖護院他関係寺院が名を連ねるほか、金倉寺には本山との関係を示す史料が数多く所蔵されている。
- 30 「根香寺総合調査報告」『ミュージアム調査報告書 第4号』(香川県立ミュージアム、2012年)。建造物等については以下参照。『四国八十八ヶ所霊場第八十二番札所 根香寺調査報告書』(香川県・香川県教育委員会、2012年)
- 31 「青峰山根香寺縁起」(本堂2-1・2)。前掲注30書(前者)掲載。
- 32 「智証大師堂再建棟札」(棟札2)、「智証大師堂修葺棟札」(棟札6)。前掲注30書(前者)掲載。
- 33 ただし、銘文は台座に刻まれており、弘法大師像とは別に制作された可能性も遺されている。
- 34 「青峰山根香寺由緒等書上控」。前掲注30書(前者)掲載。
- 35 『四国八十八ヶ所霊場第七十八番札所 郷照寺調査報告書』(香川県・香川県教育委員会、2020年)
- 36 「開帳中記録」(k-020)、前掲注35書掲載。
- 37 明治時代初期、神仏分離令の影響によって69番観音寺の境内に新たに設けられた68番神恵院が、本堂と大師堂のみを備える札所であることからこのことがうかがえる。
- 38 井上充夫「墓廟と宝形造り」(『日本建築学会論文報告集 第61号』1959年)